

藤岡謙二郎著

先史地域及び都市域の研究

——地理学における地域

変遷史的研究の立場——

この意欲的な雄篇にもし副題がそなわっていないければ、読者は主題に示された二律背反性に戸迷いされるかも知れない。しかも《先史地域》が語られる時代下限は、「古墳時代地域形成の直前」(六六頁)までであり、《都市域》の研究は主として「明治以後、在来の歴史的都市ももっていたその様相や都市域の特質」(が)「いかに変貌」(二六一頁)したかに、時代的制約をもたせて語られる。とすれば、先史時代と産業革命後の現代という、いわば人類文化の両極端に、一見別途に集注された著者の辛苦と努力とは、その副題に示唆されているというものの、何を以って統一の命題として本書をつくり上げようとするのであろうか。

主として歴史家から登せられるであろうこのような当惑と疑問とには、著者はその《あとがき》で明確に応えられている。すなわち歴史地理学研究的泰斗である著者は、特説

《地域変遷史的方法》を以てするに「対蹠的な立場の実証による理解が必要だと考え」(四三九頁)られて、それを強いられたのである。

しかもこの《地域変遷史的方法》は、歴史的・動態的な地理学研究法と本質的に相通するものであることは、本書中に著者の《歴史地理学理論》として詳細に述べられているところであり、その理論を具現した実践の面にあつても、たとえば、先史時代エクメネーの水域に対する境界を現時の洪水氾濫限界と類比させ(二四〇、一五一頁)、あるいは現代都市の成長を歴史的な核との関連において捉えようとする操作となつて示されているのである(二八四頁)。

要するに、主題は先史地域と現代都市域との量観変遷をめざしながらも、《変遷史的方法》の展開は、時代制約を超越した適確な考証と脈絡とを内容に盛上げており、書名より印象づけられる不審の念は、副題やあとがきによって理解するよりも、内容にふれることによって完全に払拭されるであらう。

いなそれ以上に、この独自の歴史地理学理論を以て貫かれた「先史地域及び都市域の

研究」は、地理学の数多い著作の中にあつて一つのモニメントであることを読者に感懐させるであらう。その蔽うところは先史学・考古学・歴史学・都市学の多岐にわたる、地理学徒一般にそのような博識が具備することが理想であるとはいへ、偉材でなければ容易に到達できない成果であらうと考えられる。

評者の浅学非才を以つてして、生涯の恩師である藤岡先生のこの雄篇を前にすれば、おのずから学生時代の、絶えずわれわれが強い力で曳きずられている印象の強かつた《先史地理学》《都市地理学》の講義の回想にふけり、今なお遠く及びえない距りを感じるわけである。おがましくも《紹介》の筆をとるのも、そのような回想のなせる業でもあるが、しかし一方、地理学が科学として成立する以上、地理学のプラーヌ・ビュブリックが存在しなくてはならぬし、考古学・都市学・歴史学からの本書に対する批評がなされるのとは別に、本書を地理学の広場へ導き出したためでもあつた。

さて著者自身の主張によれば、主論は第一編「先史地域の変遷史的研究」であり、第二

編「都市域及びその周辺地域の変遷史的研究」は付録の扱いであるといわれる（四三九頁）。しかしこの主張は、私の読後感からすれば、双方の研究対象に費された著者の研究年限にもとづく、分別ある口上に過ぎないのであって、なるほど学問分野に関する展望、方法論の展開等を冒頭にかかげた先史地域の研究に、著者の全力が集中し、大半の紙幅が割かれているとはいえ、実証的叙述の比重の上からいえば、都市域の研究は必ずしも補論の枠づけにはまるものではない。たとえば第一編において述べられる先史地理学研究法の中に、歴史地理学に関する一般論が併せ語られている節を含んでいるが、この「地理学における地域変遷史的研究法と歴史地理学」と名づけられる節が、実質的には第一、二編に先立つ序論としての意味を持つていることを見出せば、このことは、より適確に理解されるであろう。

この節において著者は、歴史地理学の *chronology* と *chorology* とにわたる二面性について語り、次いで地域の過去の姿と現在の姿とを結合させる方法としての「地域変遷史的研究」を説く（四六頁）。これは換言すれば、

歴史のある一定時（現在をも含めた意味における）の空間描写を目標としつつ、その描写を歴史的時間の方向からも攻究する方法であり、「時の断面投影比較説とでもいふべきもの」（五一頁）と述べられる。この《変遷史的研究》の立場は、五三頁の図示によつてかなり明瞭に読者に理解されるのであるが、先史・原史・歴史・現在・未来の何れの断面を規準にしても変遷史的方法是成立するとの主張が認められる（五五頁）。

ところでこの《時の断面》は、無限に細刻される画面にもたとえられるが、たとえば先史地域を原史地域や歴史地域全体と明瞭に区別させるためには、ある程度「厚みをもつ先史地域全体」（六〇頁）の画面が必要であるとして後段の「先史地域の変遷史的研究」が実証的に展開されて行く。この厚みをもつ時期とは、近畿地方の実証的研究を例にとれば、上にも述べたように、「古墳群ごとの地縁の社会の形成」を目前とした「古墳時代の直前まで」が時代単元とされ（二四四頁）、極めて合理的であるといわざるをえない。

この歴史地理学理論の展開を著者独自の理

論の開陳と解釈するならば、わが國をフィールドとした《先史地域》《都市域》の実証研究に先立つ既往の研究の回顧ならびに地域論の紹介は、著者の実証研究を培つたツォイナ・クラーク・クロフォード・クロバー或いはディキンソン等の欧米学者の業績をはじめとする、数多くの内外文献の網羅であり、実証研究の理論的・具體的な拠りどころを理解する上に貴重なものであろう。

《先史地域》と《都市域》とを扱う場合の基本的な接近の仕方の変更として、次のようなこともその中から読みとれる。

著者が最も早くからその専門課題とされた北欧中石器時代の地域研究は、独立の章として第一編第二部に収められている。中石器時代が自然環境の変動が顕著であり、自然環境と人類生活の結びつきがティビカルに現象している事実によつて、同じく中石器時代を専門とするクラークが学問的な刺激をうけたと同様に（一六頁）、著者自身も同様な契機から先史時代に対する並々ならぬ関心と洞察を深められるに至つたとするのは失礼であらうか。

先史文化の解釈には厳密な環境決定論がま

だしも通用するとしても、都市域の形成・変化を適確に把握するためには、都市文化を醸成し、それを絶えず流動せしめている経済現象の理解を欠かすことは出来ない。このことについて著者は第二編の冒頭で触れられ、都市域変遷の研究に「自然・人文両様の条件の理解が……これら両作用が混然と織りなされたひろがりをもつ地域（二六一頁）であるだけに、とりわけ必要であることを強調されるのである。

肝腎の実証的叙述の部分については簡単な紹介しか許されないが、絶えず説得力に富んだ図表と、懇切丁寧な引用参考文献を添加される著者の努力は、とりわけわれわれ後進学徒への恩恵として貴重なものがある。しかもその叙述はそれらの効果的な色どりを伴って、地理学の核心的テーマによって貫かれて行く。すなわち遺跡・遺物の分布、先史集落の立地・機能、先史地域の区分等。とりわけ遺跡の地形的位置 site から交通的位置 positionへ、更には機能へとの推論（二〇九頁以下）は、著者積年の蓄積になる豊かな資料内容が巧みに整理されている。ただ《豊かな》とい

っても、今日の農業生産が地表を蔽いつくすものであり、農業地域区分が、連結した面を何処で切断するか悩むをもつとはいえず、素材に不足はない状況と比較すると、第一編の結論となつてゐる《地域区分》を容易にする程《豊かな》ものでもない。素材としての遺跡分布が、既述の発掘を大前提としてゐる以上、著者自身も述懐されるように《先史地域区分》はあくまでも仮説の宿命をもつものかも知れない。しかし著者の地域区分線への配慮等には敬服すべきものがある。

第二編の実証的部門は、まず日本の現代都市の性格分析にむけられた後、京都と大阪という対称的な二大都市を取上げた上での市域の拡大、景観の推移、機能の変化、居住民の動態等が刻明に描写され、大阪の場合はそれを取りまく衛星都市群の生息が併せ述べられる。ただ、衛星都市群個々の工業化の程度が、大阪への工場通勤者を含むであろう各市の工業人口率で一見呈示されている（三五六―三七頁）ことは説明にやらずれがあるので、はなからうか。

最後に私なりの希望を述べることをゆるさ

りたい。冒頭にもふれたような《先史地域》と《都市域》との間に横たわる大きな空隙は、著者自身の理論にもいわれているような、歴史時代―あるいはより薄い画面としての古代・中世・近世―に視点を置く操作によつて埋められることが切望されてならない。また先史地域研究を中部・近畿地方以外の地域に展開されることも、私が述べるまでもなくすでに著者の胸中にその方策が去来しているのかも知れないが一言希望として申しそえたい。ともあれ八年を遡る以前に「地理と古代文化」なるエスキースを発表された先生が、その旧作を更に発展されてここに雄大なタブローをものにせられたことに、深き敬意を払うものである。ただ《書評》は元来、私自身の生活原理でもある「不言実行」の基に反するものでもあった。

（四六一頁 九〇〇円 柳原書店）

——末尾 至行——